

高尾山における観光地の成立

— 霊山から観光地へ —

早稲田大学

小貫 浩

1 目的

高尾山は高い人気を持つ観光地だが、江戸期に霊山としてあった高尾山が観光地化していく一連のプロセスを扱った先行研究は意外と少ない。本報告は江戸後期から昭和初期に至るまでの高尾山に焦点を当て、それまで霊山としてあった高尾山が観光地として成立していくプロセスを、江戸期に既にあった名所としての眼差しと交通メディアの果たした役割を踏まえ、更にアーリの観光地成立の諸要件を参照しながら分析する。一般にそれまで霊山としてあった山岳寺院が観光地化していくプロセスは、鉄道を通じた場合信者や参詣者の輸送から始まるケースが多かった。これに対し高尾山の場合、甲武鉄道がいち早く観光地として発掘し、観光地化が推し進められている。このことから、本報告では霊山としての高尾山の観光地化を江戸期からの潜在可能性の顕在化として捉え、そこにある交通メディアの役割やこれを利用し合う主体の在り方に着目しながら議論を展開する。

2 方法

基本文献として、明治二十二年の甲武鉄道開業当初に記載された高尾山の広告案内を中心に、江戸末期に高尾山を紹介した『八王子名勝志』、明治期にしばしば発刊された鉄道案内書や一般向けに出版された観光案内書などの記述を手掛かりに分析を行う。

3 結果

江戸中期の日記や『八王子名勝志』からは、霊山として記述される高尾山の中に既に名所としての描写が認められ、江戸期から高尾山が霊山としてだけでなく、桜や滝などの名所として眼差されており、甲武鉄道が江戸期にあった遊山的伝統を引き継ぎながら、日帰り可能な観光地として開業当初から高尾山を発掘しようとしたことが確認される。また鉄道案内書においては明治三十四年に開業した浅川駅（高尾駅）では、それまでの八王子駅からの信者や参詣者の利用から登山者が利用する駅へとその記述が変化している。更に昭和初期に開設された高尾山ケーブルカーでは運営主体は高尾山薬王院であり、信者や参詣者の便宜だけでなく一般観光客や登山者の利用をも意図した交通メディアとして、観光地化を積極的に推し進める主体となっている。しかもこの場合、ケーブルカー利用の一般観光客や登山者も又薬王院の境内をくぐり抜けることで参詣者ともなりうる複合的両義的存在であり、そこに薬王院・地元との間の相補的な関係を確認することができる。

4 結論

以上から、江戸から遠距離にあった高尾山の持つ観光地としての可能性を鉄道会社がいち早く注目し、観光地化を推し進める主体となる一方、薬王院もまた観光推進の主体となり始めている。他方、交通メディアを利用する登山者や一般観光客も、もはや信仰に依拠することのない新たな体験様式（スタイル）を選択しながら、同時に参詣者ともなりうる複合的両義的な主体として、江戸期以来の信者や参詣者ととも高尾山に引き寄せられている。こうして高尾山は霊山であると同時に観光地として眼差され、交通メディアやこれを利用する人々と薬王院・地元との相補的で複合的な関係を通し高尾山の観光地化が押し進められており、そこに山岳仏教としてのスタンスが保持されつつも霊山から観光地へと向かう高尾山の多様で多面的な姿を見ることが出来る。

文献

『八王子名勝志』（著者不詳 国立国会図書館蔵）
鉄道院 1918『鉄道旅行案内』